ブータンから　ともだち　がやってきた

－福岡県春日市立天神山小学校の事例－

大澤正明

小学校の職員室に入るのは何十年振りのことだろうか。かなり緊張した。「入ります。○年△組の＊＊です。××のことで来ました」というような妙に堅苦しく杓子定規な礼儀正しさに触れるのは最近ではめったにないことなので、思わず起立してしまいそうになる。

天神山小学校を訪ねたのには二つの理由があった。一つは、最近私が関係しているブータンから小学生の子どもが二人やってきているという。私自身、多少の違和感を持ったブータンの文化と日本の文化がはたして馴染むことができるのだろうかということに興味があった。もう一つは、「日本人はなぜルールを守ることができるのだろうか」というテーマ。なぜ私たちは、10 項目を超える分別収集に耐えることができるのか、なぜ道路にごみを捨てないのか、外国からやって来る環境対策担当行政官から頻繁に問いかけられるその謎の答えを小学校の教育者に訊ねてみたいと思った。　　（取材：平成 26 年 7 月 17 日）

学校名	春日市立天神山小学校
住所	〒816-0855　春日市天神山 6 丁目 39 番地
創立	昭和 56 年　春日西、春日南小学校から分離、新設
児童数	489 人（平成 26 年 7 月現在） 1～3 年生：3 組、4～5 年生：2 組、6 年生：3 組 たんぽぽ組、ひまわり組
教職員数	39 人 校長：谷口慎二

１．わんぱくウォーク

スリッパを脱いで靴下もとり、裸足のままグランドに出ると、やや目の粗い土が足の裏に食い込んでくる。「大丈夫ですか？」と谷口校長先生から声をかけられた。「結構、辛いですねぇ」と答えたものの、耐えられないような痛みではない。むしろ心地いいといっていいかもしれない。土の一粒一粒が丸みを帯びているからだろう。子どもたちが続々と校舎からグランドに出てくる。みんな体操着を来ており、男子生徒は上半身裸の子が多い。いや、生徒だけでなく、男性の先生の多くも上半身裸だ。いくらなんでも私はそれは恥ずかしい。保護者の方なのだろうか十数人の女性が生徒を囲むように立っている。校門で生徒の登校を見守っていた年配の方々も加わり、校舎から出てくる児童とハイタッチを交わしている。

月曜日から木曜日の朝 8 時 35 分から 45 分まで行われているこのわんぱくウォークは、「たくましい体」「かしこい頭」「やさしい心」「食べる力」の四つを教育の柱とするこの学校の象徴的な行事として、昭和 56 年の開校以来連綿と続けられてきた。健康な体つくりや土に馴染む心を養うだけではなく、子どもたちが裸足のまま歩くこのグランドを一つの神聖な場として、グランドそのものを清潔に安全に保つためのマナーの育成の場でもあるのだという。

一見、無秩序に見えるが、決まったルールがあるのだろう、ぶつかることもなく黙々と歩き続ける。

歩く姿勢も大切。あごを引き、肘を直角にして大きく振る。一本のラインの上を歩くように大きく尻を振る。恥ずかしがってはいけない・・・と、初心者はまずそれと戦わなくてはいけない。

２．ブータンから来た子どもたち

今回ブータンの子どもたちが天神山小学校に来ることになったのは、福岡市が主催する「アジア太平洋こども会議・イン福岡」の招聘事業で同校に通学する生徒の家族がブータンの子どもたちをホストファミリーとして受け入れることになったからだ。「アジア太平洋こども会議」は、アジア太平洋地域から 11 歳の子ども達を“こども大使”として招いて、福岡県内各所でホームステイし、学校に登校したり、多国籍のこども大使と寝食を共にするキャンプなどによって国際理解・相互理解を推し進めるもので、1989 年のアジア太平洋博覧会～よかトピア～の参加イベントとして、初めて開催された。今年度は、220 人の子ども大使と 42 人のシャベロン（引率者）が招聘されている。ブータンからは 8 人招聘し、天神山小学校に 2 名配属された。全行程 7 月 10 日から 24 日まで 2 週間の滞在であるが、天神山小学校へは 3 日間登校し、私が取材したのはその 2 日目だった。

5 年 2 組に配属されたのは Tashi Tshewang 君という名の男の子で、頭文字をとって T・T（ティティ）と呼んでくれということだった。たった一日だけで、活発で積極的な子だという印象を与えたようだった。それは思い当たることがあった。ブータンの男性は総じてあっけらかんとしている。たとえば貧乏であることを気にしない。お金があってもなくても借金して好きなものを手に入れる。お金が無くなれば、誰か、たぶん家族の誰かが助

けてくれるからだ。だからと言って、ただの風来坊ではない。自らも家族のために助ける。一生懸命働かないが、家族のために足るだけは働く。それは私たちの感覚からすれば、満足できるレベルではない。私たちの感覚からすると、もうちょっとだけ余裕が欲しい。私たちの多くは、そのためには多少は家庭を犠牲にしても仕方がないと思う。だから、ブータンの人たちのお気楽に見える生き方には違和感を持つことがある。正直に言えば、癪にさわると言っていいような違和感なのだ。小国でありながら、ぎりぎりの生活をしていながら、堂々としている。少しも卑下しない。ごく簡単に卑下してしまう日本人には、かなり辛い違和感なのだが、はたして子どもたちはこの違和感にどのように反応するのだろうか。

6 年 2 組に配属されたのは、Karma ちゃんという女の子だった。目が澄んでおとなしい子という印象を与えていた。「とっても可愛い子で」というのが多くの方々の口にする言葉だった。しかし、口に出して誰も言わないけれど、「できたらもっと笑ってもらえないだろうか」というのが、共通の思いだったのではないだろうか。ブータンの女性は、いわゆる愛想笑いをしない。怒っているわけではないのに、簡単には笑みを作ってくれない。笑みを引き出すためには、長く顔を見合わせるか、あるいは話しかければいいのだが、照れ屋でなおかつ英語が苦手な日本人にはそれはかなり難しいことだ。笑わない Karma ちゃんと日本の子どもたちはどのように付き合っていくのだろうか。

教室で写真を撮らせてもらった。左から 3 人目の小柄な女性が Karma ちゃん。カメラに対して作る表情が日本の子どもたちとは違うような気がする。

３．日本人は何故ルールを守ることができるのか

中国や東南アジアの国々から廃棄物対策に関する研修に参加される方々と接する機会があるのだが、彼らが共通して驚きの言葉を口にするのは、「日本人は何故ルールを守ることができるのだろうか」ということだ。「私たちの国にも法律や規則はたくさんあるのに、誰もそれを守ろうとしない。何故、日本人は道にごみを捨てないのだろう。何故、日本人は分別に協力できるのだろう。どのようにしたら、私たちは日本のようにルールを守る国民に成長することができるのだろう」と何度も聞かれた。何故と聞かれても困る。「まあ、国民性でしょうか」と答えにならない言葉を返してきたのだが、先の東北大震災の時にも、同じような評価を受けていた[1]。

想定できる理由は、以下のようなことだろうと思う。

①民族固有の体質（DNA？）

②伝統的な社会システム（たとえば町内会など）

③独特の教育システム

DNA は私の手に余ることなのでスルーせざるを得ないのだが、本当に私たちは昔からルールを守る体質を持った国民だったのだろうか。たとえば、私たちは元々から道にごみを捨てないような国民だったのだろうか。全国の市町村どこにでもあるだろう「ポイ捨て禁止条例」あるいは「美化条例」、これは、昭和 50 年代から盛んに設けられるようになったのだが、このような条例が作られているということは、つまり、ポイ捨てする人が多かったということだろう。ならば、いつから私たちはルールを守り、マナーに留意する国民になったのだろうか。興味深いデータがある。

図 1～2 は、いずれも内閣府が継続的に行ってきた世論調査の結果であるが、昭和 60 年頃から平成の初め頃にかけて、「個人より社会に目を向けるべきだ」という意見や「社会へ貢献したい」という意見が急激に増えている。高度経済成長期が終わったのが昭和 48 年とされているので、昭和 60 年といえば、高度経済成長が終わってから約 10 年後のことだ。この時期にいったい何があったのだろうか。

[1]平成 23 年 3 月 14 日と 16 日の朝日新聞で、東北大震災に被災した人々の行動を称賛する海外の反応を紹介している。具体的にどのような点が評価されているかというと、「男性は女性を助ける」「ゴミ一つ落ちていない」「だれもパニックに陥らなかった」「すすんで食べ物を分け合う」「怒号もけんかも起きない」「整然として秩序に乱れがない」「便乗値上げが横行しない」「がまん強く、店の前に列をなして待っている」「苦あっても天を恨まず、運命に耐え、助け合う」等々である。

Q：国民は、「国や社会のことにもっと目を向けるべきだ」という意見と、「個人生活の充実をもっと重視すべきだ」という意見がありますが、あなたのお考えは、このうちどちらの意見に近いですか。

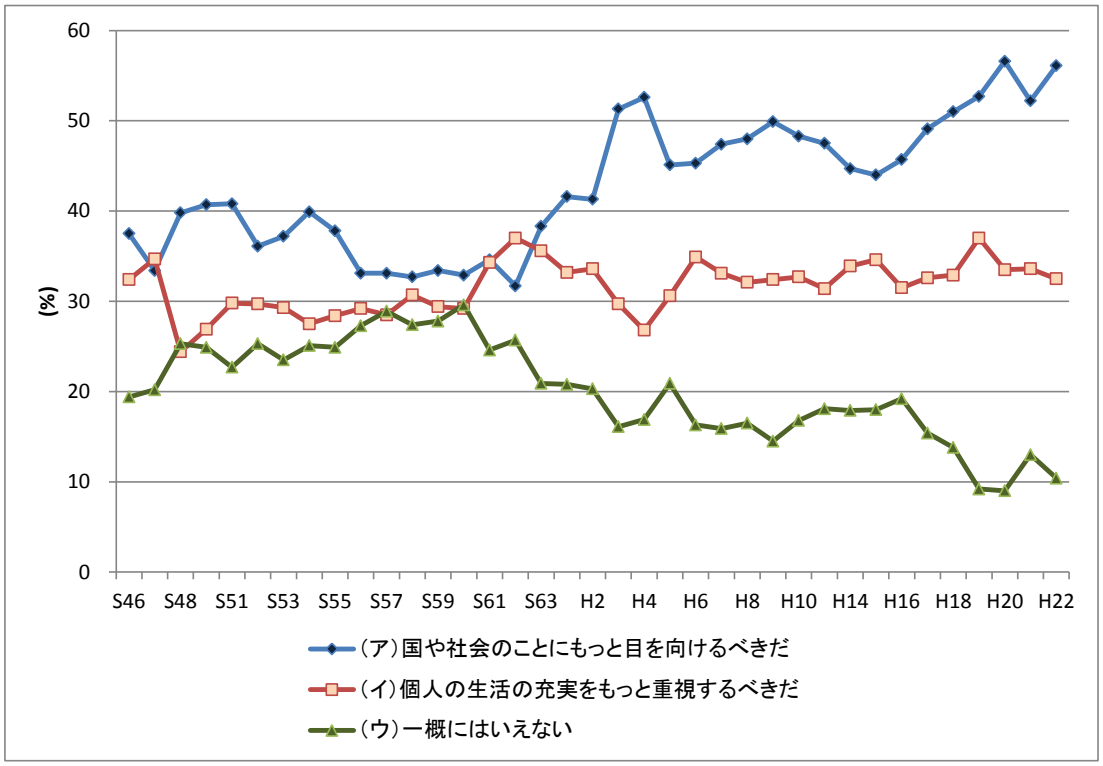

図１　個人と社会に関する世論調査結果

Q：あなたは、日頃、社会の一員として、何か社会のために役立ちたいと思っていますか。それとも、あまりそのようなことは考えていませんか。

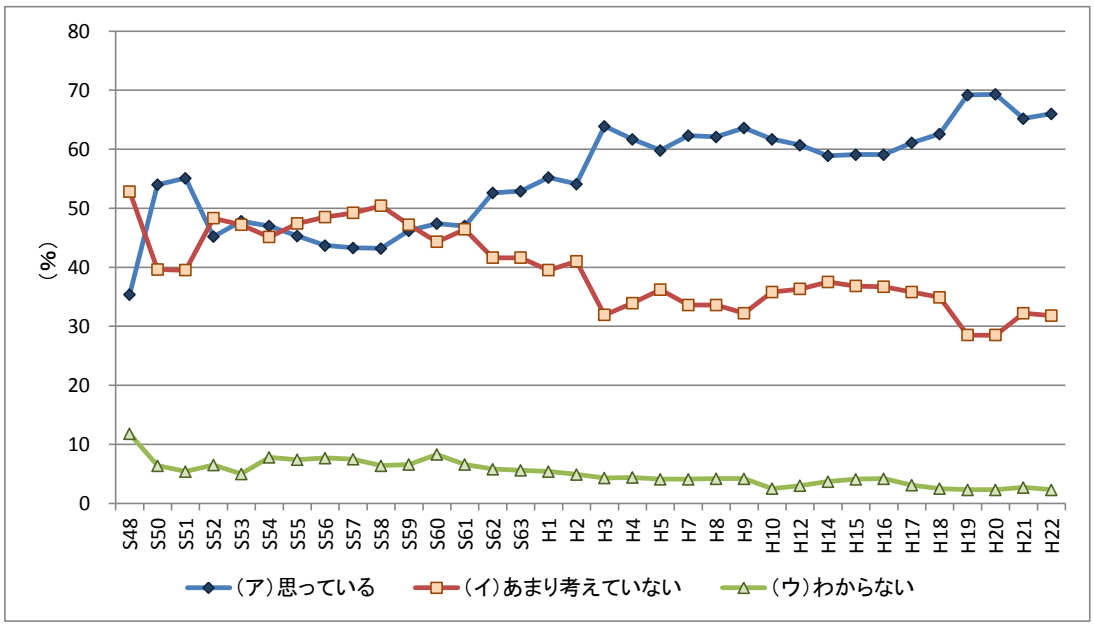

図２　社会への貢献に関する世論調査結果

４．T・T のゴールキック

さて、T・T 君の授業は、カレーライス作りから始まった。まずは、ジャガイモの皮むきで驚かせてくれた。ピーラーがブータンに普及しているのかどうか分からないが、実に器用に使いこなし、あっという間にジャガイモの皮を剥いた。私も月に一度はカレーライスを作るから、ピーラーを使い慣れているという自負はあるが、とても彼のスピードにはついていけない。ピーラーを手に持って戸惑いの表情を浮かべている子の手からジャガイモを取りあげ、2 個目もあっという間に剥く。「家事の手伝いに慣れているんでしょうねぇ」と感心したように先生が呟く。そういえば、ブータンで通訳の男性から、料理は女性の仕事ではないと聞かされたことがある。「時間があるときは私が作ります。私の方が上手いですしね」

置いてきぼりをくった子がムッとしているかというとそうではない。すごい、すごいと感心して見ている。少なくとも大人よりも子どもの方がオトナなのかもしれない。とっても小さな国の、たぶんさほど裕福ではない家庭からやってきた同年代の子と接しているという差別感をクラスの子どもたちに見ることはない。

カレーを皿に盛りつける T・T 君（右）。周りに気を遣って、おどおどする様子はない。自分の行動に熱中している。

カレーを食べ終わり、移動する T・T 君に「（首都の）ティンプーから来たの？」と聞くと、「モンガルだ」という。ブータンでも東部に位置し、首都からは遠く離れている。
「遠いね」というと、
「モンガル→ブムタン→トンサ→ワンチュ・ボタン→ティンプー→パロ（飛行場のある町）→ダッカ（トランジット）→バンコク（トランスファー）→福岡」

息もつかせず、指を折る。ちょっと自慢気だ。「地球の歩き方」でモンガルからパロまでの所要時間を足し算すると車で 18 時間。当然、途中 1 泊か 2 泊はしているはずだ。パロからバンコクまでは飛行機で約 4 時間半。バンコクから福岡までは約 5 時間。乗り継ぎがすこぶる悪いので、パロを朝 10 時頃に出発して福岡に着くのは翌朝 8 時。彼の家を出てから福岡に着くまでにたっぷり 3 日間はかかっているはずだ。自慢していいぞ T・T。

昼休み。必ず彼はみんなと一緒に遊んでいるはずだと、グランドに出てみた。すぐ見つかった。数人でサッカーをしていた。T・T は走る、走る、走る、そして、ゴール！・・・とても、FIFA ランキング最下位の国[2]とは思えない。それにしても、彼らの交わり方は不思議なほど違和感がない。じゃんけんをする、組み合わせを誰かが仕切る、

「オレはこっちか？」

「そうだ」

「わかった」

互いに肩を叩きあう。その仕草に戸惑いは少しも感じられない。ブータンにじゃんけんがあるのかどうか知らない[3]が、スムーズに溶け込んでいる。いったい彼らの言葉は日本語なのだろうか、英語なのだろうか。遠くから見ていてもさっぱりわからないが、彼らが知り合ってわずかに 2 日目だということを忘れさせるような自然な姿だったし、少なくとも私よりは彼らの方がはるかに国際化に順応性がありそうなことは確かだと思う。

[2] 2014 年 7 月 17 日現在。209 位最下位。http://www.tsp21.com/sports/soccer/fifaranking2.html

[3] その後通訳氏に尋ねたところ、ブータンではじゃんけんの習慣はないとのことである。「じゃあ、どのようにして順番を決めるのだ」と聞いたところ、「ブータン人は順番を決めたりはしない」とのことであったが、真偽のほどは定かではない。（2014.8.1、ティンプー市で）

５．マッチ棒のような松井棒

先端にタオルを巻きつけた不思議な棒が校長室の前に数十本並んでいる。巨大なマッチ棒のようにも見える。松井棒というのだそうだ。谷口校長先生の命名だ。

松井棒の歴史は古い。昭和 55 年に赴任した小学校では、「はだし教育」を実施していた。はだしであるから子どもたちの足を守るためには床を清潔に保たなければいけない。当時は、木の板をつなぎ合わせたような床であったから、隙間にはごみがたまる。松井棒の出発は「つまようじ」から始まった。床板の隙間に詰まった消しゴムのかすや綿ごみ、毛髪等などを「つまようじ」で取ってやった。その小さな「つまようじ」がやがて床を掃除する現在の松井棒に変わっていったのだそうだが、現在でも谷口校長先生自ら毎日松井棒で床を掃除する。その中で子どもたちや先生方のよさをみつけることも多いという。もちろん、生徒が掃除に使うこともある。

ところで、松井棒の命名の由来は、野球をやられていた谷口校長先生が松井秀樹氏にあやかって名付けたのだという。シャープで柔軟な打撃技術はもとより、氏の思いやりに溢れた人柄は子どもたちにとっても手本になるとの思いが込められているという。

松井棒。さまざまな応用松井棒もあるそうで、窓の桟を掃除するために給食の箸を活用した「鉛筆型松井棒」もあれば、「エコ型松井棒」もある。「蜘蛛の巣掃除用松井棒」は床掃除の際に殊の外ごみの付きがいいのだそうだ。

裸足になるということは、健康つくりのための一つの手段であるのだろうが、裸足で過ごすことを可能にする生活環境つくりの手段でもあるのだろう。この学校の掃除に対するこだわりはすごい。グランドには裸足で出ることになるので、当然のことながら、足を洗うシャワーが設置されているし、水滴が残った床を拭き掃除する当番もいる。プールから

上がった後には、衣服に水が残っていないかどうか教員によるチェックもされている。廊下に水を残さないためだ。

主幹教諭の松元先生に、「何故、日本人はルールを守ることができるのでしょうか」と質問した時も「掃除の習慣」が学校教育の柱の一つとして確立されていることを理由として挙げられていた。

「他の国の状況はよく把握はしていませんが、たとえば、学校は勉強だけするところという教育が優先されれば、ルールを守る、マナーに気を付けるという点で十分な教育ができないのではないでしょうか」

日本人のマナー、あるいはルールを守るということについて、さらに谷口校長先生にお話を伺った。

大澤：アジア各国から来られた研修員の方々から、「何故、日本人はルールを守ることができるのだろうか」ということをよく聞かれます。教育の現場から、何か思い当たることはあるでしょうか。

谷口：子どもたちにはこんな話をしています。健康というのは、自分にとっても、みんなにとっても気持ちがいいことだ。気持ちがいいといいモラルが出てくる。いいモラルはいいルールを作り、いいルールはいいマナーを作る。たとえば、飛行機に乗ったりすると、ワイワイ、ガヤガヤと騒ぎ立てる外国の人たちがいます。彼らが出て行った後はゴミだらけです。それは、周りの人たちにとってとても嫌なことですが、そういうことを気にしないモラルであれば、それが嫌なことだと理解ができません。つまり、その程度のモラルであれば、それに見合ったルールしかできません。そういうルールだとそれに見合ったマナーに終わる。日本の場合は、きれいであるとか、人のために尽くすことは気持ちがいいという風土があります。それは大きな違いではないでしょうか。

大澤：日本人は平成元年頃を境にして、個人重視から社会にも目を向けようという意識が強くなったというデータがあるのですが、それについてはどのようにお考えでしょうか。

谷口：生活科[4]の影響かもしれません。その頃から始まったもので、理科のような科学的なことではなくて、しっかり土に親しみましょう、植物と親しみましょうということや、たとえばただ単に買い物に行くのではなくて、その買い物がこの地域とどのような関わりがあるのか、あるいは物を大切にしようとかということを、知識というよりは感性として身に着けようという科目です。

大澤：環境教育ということでいうと、日本の環境教育の大きな成果として、子どもが学んだことを子どもから親に伝えていくというシステムが、かなり有効に働いているということが言えると思います。

谷口：子どもが変われば親も変わるということですね。それは確かに言えます。たとえば、段ボールコンポストで堆肥を作るという方法があります。当校では天神山校区と連

[4] 1989年に改訂され1992年から施行された学習指導要領により小学校第1学年及び第2学年に設置された教科（Wikipediaより）

携してやっているのですが、毎朝、残った食べ物を持ってくるんです。子どもが毎日持っていくことによって、親も「そういうことをやっているのか」と知ることになりますし、そのコンポストを使った収穫祭も地域と一緒にやります。

大澤：今回来られているブータンでは、そういうシステムがまだできていないと思われるので、今後、こういったシステムを移転していきたいと思っています。

谷口校長先生。このエプロンは、平成 2 年に附属福岡小学校の教育実習に来た実習生がつくってくれたものだという。すでに 20 年余使っていることになる。

６．家庭と学校と地区

「足のおそいぼくでも、毎日走ったら速くなるのだろうか」

とても魅力的なタイトルだった。5 年 1 組武藤君の夏休み課題研究の発表ポスターが階段に掲示されていた。1 年間掲示しておくのだという。家の周りを走ってみたら、最初の 1 回目は 13 分 59 秒かかった。目標を 12 分において、夏休み 59 日中 40 日計測したところ、最高で 11 分 1 秒まで縮めることができた。毎日補足説明が書かれている。父親の叱咤激励でうまくいった日もあれば、きつくてうまくいかなかった日もある。この素敵な課題研究を成し遂げることができたのは、たぶん家庭の力だ。

学校と家庭の連携ということは大切なことだということはこの成果でもよく分かる。そして、学校と地域の連携も大切なことだということを今回教えていただいた。

登校時、正門前に年配の方々が数人、交通整理をされていた。聞けば校区内 3 町内会から約 80 人もの方々が参加しているのだそうだ。そのうち何人かの方々は、朝の「わんぱくウォーク」にも参加し、子どもたちとも顔なじみになっていた。

3 町内会で、「こども見守り隊」を結成し、毎週金曜日にはお茶を飲みながら学校側と意見交換の場も設けているという。「行動の連携」と「情報の連携」の二つを進めながら、孫たちの安全を確保していこうという試みであって、10 年ほど前から積極的に地域との連携

を図るようになったという。

一方、春日市では平成 17 年から一部の学校で「コミュニティー・スクール」[5]への移行を開始し、平成 22 年に全ての小中学校が移行を完了したという。九州では最初の取り組みだった。町内会制度の衰退が叫ばれて久しいが、このような学校を中心とした、地域・家庭を結びつけるシステムが誕生しつつあり、おそらくそれが私たちの「ルールを守る」という国民性の成熟化に多いに貢献することになるのだろう。

登校時。交通整理だけではなく、声を出す挨拶の練習にもなる。子どもの様子を監視し、学校側との情報の共有化にも尽力している。

7．海のない国の水泳実習

Karma ちゃんのことが気になっていた。なんだか辛そうな気がしたからだ。行動では示しにくい性格のようで、かといって言葉もわからない。漢字学習の時間では、「源」「晩」「盛」「片」「痛」というかなり高度な漢字をドリルに沿ってなぞっている。先生が懸命に励ましながら手伝う。外国人は漢字の刺青を入れるのが好きらしいとも聞くのだから、ひょっとしたら漢字を学ぶことは斬新な楽しみがあるのかもしれないが、なんだかやはり胸が締め付けられる。

ミニ自動車の組み立て実習という科目もあったのだが、日本語の説明がかなり長くてちょっときつそうだ。

掃除の時間はどうなのだろうか。ブータンでは帰りの掃除がどうなっているのかよく分からないが、雑巾の拭き掃除はやるのだろうか[6]。もしやらないのであれば、斬新な経験になるのだろうが、・・・・いつの間にか私は Karma ちゃんの親のような気持ちになってい

---

[5] コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）とは、学校の運営に地域の声を活かすとともに、学校・家庭・地域がそれぞれの役割と責任を果たしながら、共育（共に育てる）を進める新しい仕組みです。（春日市 HP より）

[6] その後通訳氏に聞いたところ、ブータンでは朝のお祈りの前に 30 分間掃除をする。雑巾がけについては、ブータンの校舎の床は日本のようにきれいなものではないので、雑巾で拭くことはなく、掃き掃除が中心だという。（2014.8.1、ティンプー市で）

るのだろうか、心配でたまらない。ブータンの女性は愛想笑いをしないと理解している私も、やはり心配だ。楽しんでいるだろうか。日本に来てよかったと思っているだろうか。昼食後に失礼する予定だったのだが、なんだか心配で、最後の水泳の時間まで見届けることにした。

「写真を撮っていい？」と聞くと、ピースをした。ブータンもピースなのかと、ちょっと驚いて、フラシュを使うのを忘れてしまった。

雑巾を絞る Karma ちゃんの横で、心配そうに見ている子がいたので入ってもらった。後で聞くとホストファミリーの家の子なのだという。

もちろん、ブータンには海がない。ヒマラヤ山麓の国なので、川も急流でおそらく泳ぐことはできないだろう。プールがあるかどうか定かではない[7]が、気楽に誰でもが利用できるプールはないだろうから、Karma ちゃんはおそらく泳げないだろう。たぶん初体験にな

[7] その後の調査によると、首都ティンプー市には、1 か所だけプールがある。使用者は限定されているようで、多い日の日曜日で 100 人を超える程度だという。たまにはロイヤルファミリーも利用するという。使用料金は 270Nu（約 500 円）、メンバー会員の場合は年間 7､900Nu（約 13,500 円）であり、20 歳代の公務員の月収が 13,000Nu（約 22,000 円）程度であることを考えれば、気楽に使用できる施設ではない。（2014.8.2、ティンプー市で）

るだろうプールを楽しんでくれるのかどうか、ちょっと、いや、かなりドキドキしながら、見学者席から観察した。私の隣りには、怪我のため参加できない男の子がいた。私自身、泳げないので、「水泳に参加できないのはラッキーなんじゃない？」と、教育の場で言ってはいけない大人の言葉で問いかけたら、「そんなことないですよ。見ているのは退屈だから」と口を尖らせた。

授業は着衣水泳というもので、服を着た状態でプールに入り、おぼれたらどう対応するかというのが目的なのだという。まずは、顔を水につけ、体をだるま状態にして浮く練習だったのだが、やはり彼女は水に顔を付けることができない。しかし、怒ってはいない、戸惑ってもいない、むしろ微笑んでいる。次は、仰向け状態で浮く練習なのだが、もちろんできない。しかし、先生と彼女のそばにいる何人かの女子生徒たちが支えてやって、不完全ながらも挑戦できている。いや、これは、たぶん、彼女にとって、いい夏休みになったのではないだろうかと、その時やっと思うことができた。

授業はまだまだ続く。おぼれた時の訓練なのだから、プールの外から投げ込まれたペットボトルを掴みに行って、それをラッコのようにお腹に載せて浮くという練習になった。Karma ちゃんもペットボトルを掴みにいく。必死に水の中を走る。仰向けになってそれを腹に載せて浮く。きちんとできたかどうかは分からなかった。途中から、Karma ちゃんに付き添って、しっかり支えてやっている女性が気になったからだ。あまりにも親身につきっきりで、私には彼女が随分大きく見えた。生徒ではないと思った。たぶん、海外から来た特別な友達に楽しんでもらえるように、学校側が気を利かせて専門の補助員を用意したのに違いない。

「Karma ちゃんの隣にいる女性は先生なの？」
と隣で見学していた彼に聞いたら、
「生徒ですよ。あんな小さな先生はいないでしょう？」
とこましゃくれた返事を寄越した。

そうか、生徒だったのか。私には彼が言うような小さな子には見えなかった。私たちも、ああすることによって大きく見えることができるのだと思った。

T・T 君にしろ Karma ちゃんにしろ、ごく普通に接して、周りもごく普通に助けてやれば、それでいいことなのだ。当たり前といえば当たり前なのだけれど、そのことを日本とブータンの子どもたちに教えられたような気がした。恥ずかしながら、私自身もちょっと成長したような気がして学校を後にした。

＜了＞

準備運動する Karma ちゃん（左から 3 人目）。笑っている。

ペットボトルを追いかける（左側の黄色い帽子）。この後も、ずっと誰かが彼女を支えていた。

首都ティンプー市北部の河川。これが市内中心部に流れこんでいく。この川で泳ぐ人はいない。